

吉野復興大臣岩手県訪問ぶら下がり会見録
(平成29年7月6日(木) 15:22～15:35 於) 岩手復興局)

1. 発言要旨

まず昨日来の大雨で九州北部の方々が被災をされました。本当に亡くなられた方々もおりますし、お悔やみとお見舞いを申し上げますと思います。あの映像を見て、6年前の自分たちの被災の状況を思い出したわけでありました。本当にお見舞いを申し上げますと思います。

さて、今日は岩手県釜石市、遠野市、北上市を訪問してまいりました。

釜石市では、「釜援隊」という復興支援員を中心とする団体ですが、私も2カ月で大体一巡し、やはり被災地・被災者を支援する方々が大きな働きをしているということを、この2カ月間で感じました。二巡目はこういう支援をしている方々とじっくりお話をしてみたいということで、二巡目が今日から始まったわけです。まず釜石市の釜援隊を訪問させていただきました。ここは、外部の方がほとんどでございまして、やはり自分たちの住んでいる町には、ちゃんと宝物があるんですけれども、その宝物に気付かないのがそこに住んでいる方々でございまして、ですから、外の目から見て、宝物がきちんと釜石市にはあるんだというところを気付かせてくれる、そういう黒子に徹して、やはり主役は市民であり、行政であるわけですので、行政の足りない部分を黒子役として補っていくという、素晴らしいお話を伺ってまいりました。

また、製麺工場の「川喜」さんを視察をさせていただきました。おそば、うどん、焼きそば等々をつくっているわけですが、本当においしく試食をさせていただきましたけれども、おいしいおそばです。そして、うどんもこしがあって、今まで私が食べた中では一番おいしいうどんだなというふうに感じました。こういう素晴らしい技術を持って、岩手県産の粉を使って作っているということです。大体、東京がマーケットなんですけれども、素晴らしい製麺工場を見てまいりました。

次に、遠野市を訪問したわけですが、ここはいわゆるバックアップの町という形で、歴史的にも三陸の津波が、たびたび起こっているのです、遠野に在住の御先祖様はきちんとそれぞれの津波の被害地に支援をしていたという、大きな歴史があります。それで、震災前に自衛隊も参加した大規模な訓練を行っていたそうです。この訓練が大震災の際には、大いに役立ったということで、バックアップの町としての役割を大いに果たそうということで

ざいます。こういうバックアップできる場所がないと、被災地だけではどうにもなりませんので、本当に遠野市の取り組みは素晴らしいものだと感じたところです。

また、資料館も視察させていただきました。様々なその当時の記録がございます。こういう記録もきちんと保存していくことが、これからやはり災害は避けられないわけでございますので、そのためにも役立つ資料がたくさんあるということも勉強をしてきたところです。

次に、北上市でございます。ここには「いわて連携復興センター」がございます。それぞれの岩手県内のNPOが各地区にございます。この各地区のNPOを束ねているところがここでございます。代表の方は釜石市で被災をされた方でございます。私も被災をしておりますので、何か心が通じ合ったといいますか、本当に心が通じて、「れんぷく」（連携復興センター）の仕事は被災をされた方々がなかなか口下手なものですから、自分でこうしたい、ああしたいということが言えない。そこの通訳を私たちがするんだという、その言葉を聞いたときには、本当にそうなんだ、なかなか被災者はこうしたい、ああしたいとなかなか言えないんですね。私も福島ですから、そうなんですけれども、その通訳をしていくのがれんぷくの仕事なんだということで、素晴らしい方々がおられるなど、そんな思いでございます。

最後にここで、岩手復興局の皆様方に6年間の素晴らしい復興に対する御礼と、そして、これから人間の復興を目指した、そういうところで更なる御尽力をお願いしたいという訓示をさせていただきました。

以上です。

2. 質疑応答

（問）今回、岩手に入られるのは4回目ということで、そのほかにも宮城、福島など、東日本大震災で大きな被害を受けた県に視察に入られていると思います。宮城、福島と比べまして、岩手県内の復興状況をどのように評価していらっしゃいますか。

（答）地震・津波の災害と、福島原発災害とは違うと思います。地震・津波の被害を受けた岩手、宮城は、ほとんどハード面は十分に進行しているというふうに思います。また、復興道路、復興支援道路も確実にあと残り4年間で完成させねばならないという強い思いでございます。同時にソフト部分です。特に岩手の場合は、水産加工業者がグループ補助金等を利用して、工場は再建しました。従業員も人手不足ではありますが、何とか確保して、生産を続けたんですけれども、でも、販売がなかなか思う

ようにいかない。特にスーパーの棚が、ほかの方々に取られてしまったという、その販路開拓などのソフト部分がこれから本当に大事になってくる。ですから、ハードよりもソフトに重点を置く、そういう施策をこれからとっていかなければならないなというふうに思います。同時に、同じソフト部門ですけれども、人間の復興、心のケアというところも、自立をした、自立できる人々をいかにつくっていくか、こういうところをNPOの皆様方をお願いをしているところです。

(問) これから今後、2018年度の政府予算、概算要求案をまとめていくという段階に入っていると思うのですが、改めて重点として取り組みたい分野や事業、先ほどと重なる部分はあるかもしれないですが、お聞かせいただけますか。

(答) 復興道路、復興支援道路は確実にあと4年間で完成させるだけの、いわゆるハードの予算要求はきちんとしておきたいと思います。同時に、これから予算の獲得に向けて、人間の復興を、私が大臣になってからのソフトの部分、ここにも十分な予算要求をしていきたいと思っています。

(問) 復興計画の期間で、岩手県は平成30年度で、一応、8年間の復興計画期間が終わるんです。国の場合は、復興創生期間は32年度までですけれども、進捗状況というより、計画の設定期間がそういうふうになっているんですが、基本的にその計画期間が終わると、その先も復興については続けなきゃいけないという中で、県は総合計画の中に復興を位置づけるということにしているんですけれども、大臣としてはそういうそれぞれの県市町村等の対応についてはどのような認識を持っていらっしゃるか教えていただきたいと思います。

(答) 復興庁もあと4年で自動消滅するわけですがけれども、福島の場合は、あと4年で終わるというわけではございませんので、国会での質問の中にも出てきましたけれども、復興庁が終わった後の体制づくり、これをどうするかという質問がたくさんございました。福島の例をとれば、あと4年で福島復興ができ上がるわけではございませんので、それなりの復興を続けていく組織体制づくり、これをこれからきちんと考えていかなければならないという答弁をしたところです。(仮称)福島復興庁という形で、私の頭は最初、福島だけをイメージしていたんですけれども、岩手、宮城を訪問しまして、やはりあと4年間で復興が完成しないという首長さんがいるんですね。そこの不安も聞いておりますので、(仮称)福島復興庁でございますけれども、宮城、岩手も含めた中で、きちんと新しい組織で対応できる方向にきちんと持っていきたいなというふうに思っています。

(問) そうすると、県や市町村の復興期間が国と違って、今、おっしゃったような統一的な考えで、その計画期限が切れた後に関しても、今、おっしゃったような受皿といいますか、そういったもので対応していきたいという御主旨だというふうに。

(答) 国としてはですね。

(以 上)